

芸閣

～図書館だより～

第2号
2018年5月
桐蔭図書館発行

芸閣...「うんかく」と読みます。
書庫、書斎という意味です。
(「芸」は書籍に挿む虫除けの香草)

風薫る5月

抜けるような青空、目に鮮やかな新緑、花々が咲き乱れ、5月は一年中で最もさわやかで過ごしやすい季節です。初夏の南風は、やや強い風を青嵐といい、これよりも柔らかい風を薫風といいます。初夏の香りが薫る風としてふさわしい名前ですね。



図書館員が選書に行ってきました！

図書館員が本を3冊
紹介します！

5月18日、和歌山城近くの宮脇書店にて、図書館員による選書が行われました。そこで今回はそのうちの一冊を紹介します。

『文豪の凄い語彙力』山口謠司 著

芥川龍之介は、寒梅の老木がつけた花をこう表現しました。「的礫たる花」――

「的礫」は、「白く鮮明なさま、光り輝くさま」という意味持つ言葉。彼はこうして黄昏の中に浮かんで見える白い梅の花を美しく表現したのでした。

この本は、先述したような繊細で美しい表現から聞き馴染みのある表現まで、幅広く紹介しています。これらは総じて、文豪と呼ばれる彼らが悩みに悩んで紡いだ、伝えたいことをぴったりと表現してくれる言葉ばかりです。是非この本を読んで文豪の語彙に触れてみてください。

3年 山本

『日本人なら大事にしたい和の知恵』

藤野紘 著

皆さんは、「なぜ平安時代の女性は十二単のような重くて大変そうな服を着ていたのか」知っていますか？ それは単に寒かったからです。当時の宮廷は寝殿造ですが、これは寝室以外は壁がなく、実に開放性に富んでいます。だから夏は涼しくても、冬は雪が家の中にまで入ってしまうこともあるのです。つまり、十二単は寒いゆえに次から次へと重ね着することによって生まれた衣装なのです。しかし、ただ重ねるだけではなく通気のために脇に穴を残したり、また重ねることによって優雅さを演出したりなど、実用面以外にも様々な工夫が凝らされています。

この本では他にも「なぜ春には花見をするのか」「お寿司の意外な原点」などについてわかりやすく紹介されています。ぜひ読んでみてください。

3年 柏木

新しく入った本の紹介

日本文学

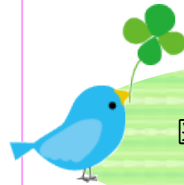
『オーデュボンの祈り』 伊坂幸太郎 著 新潮社
『夜の国のクーパー』 伊坂幸太郎 著 東京創元社
『青の数学』 玉城夕紀 著 新潮社
『リボン』 小川糸 著 ポプラ社
『一〇五度』 佐藤まどか 著 あすなろ書房
『推定少女』 桜庭一樹 著 角川書店
『なんとなくな日々』 川上弘美 著 角川書店
『「文豪」がよくわかる本』 福田和也 著 宝島社
『もし文豪たちがカップ焼きそばの作り方を
書いたら青のりMAX』 神田桂一ほか 著 宝島社
『文豪ナンバーワン決定戦』 福田和也 著 宝島社

外国文学

『太陽と月の大地』 コンチャ・ロペス＝ナルバエス 著 福音館書店
『いのちは贈りもの ホロコーストを生きのびて』 フランシーヌ・クリストフ 著 岩崎書店
『わたしがいどんだ戦い1939年』 キンバリー・ブルバイカー・ブラッドリー 著 評論社
『オリジン』 上・下 ダン・ブラウン 著 KADOKAWA

その他

『車いす犬ラッキー』 小林照幸 著 毎日新聞出版
『A I vs. 教科書が読めない子どもたち』 新井紀子 著 東洋経済新報社
『広辞苑を3倍楽しむ その2』 岩波書店編集部編 岩波書店
『モデルが秘密にしたがる体幹リセット
ダイエット』 佐久間健一 著 サンマーク出版
『千年の田んぼ 国境の島に、古代の謎を追いかけて』 石井里津子 著 旬報社
『動物のおりがみ』 川端文昭 著 誠文堂新光社
『学ぶ脳 ほんやりにこそ意味がある』 虫明元 著 岩波書店
『経済数学入門の入門』 田中久稔 著 岩波書店
『ベルルスコーニの時代 崩れゆくイタリア政治』 村上信一郎 著 岩波書店



図書館員が選書した本の紹介です
(表面のつづき)

もうすぐ6月ですね。
5月の芸閣の発行が大変
遅く になりました。
m(_ _)m



イラスト：わんバグ

『陰翳礼讃・文章読本』 谷崎潤一郎 著
「日本らしさ」とは何か、「和」とは何なのか。
著者・谷崎潤一郎が日本らしさについて考えた
ことが陰翳礼讃です。「陰翳」とは、かげ、く
もり、転じて、深みのあること、「礼讃」とは、
ほめ尊ぶこと。日本文化のかげに着目しながら、
国内外で高い評価を得た文豪・谷崎潤一郎の日
本観を知ってみませんか。ほかに、大谷崎の
執筆の様子や文房具の好みを知ることが出来る
文房具漫談、大谷崎が考える「よい文章とはど
ういうものか」をまとめた文章読本など、読み
応えのある一冊です。

2年 西川